
東方変物伝 ~ Power that changes everything

E X くきわかめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方変物伝〜power that changes everything

【Nコード】

N1427T

【作者名】

EXくきわかめ

【あらすじ】

急な死、そして東方の世界へ転生。

そんな東方好きな中学生のとある幻想入り物語です。

駄文、gggd、キャラ崩壊の可能性ありに更新不定期と駄目要素が満載ですので、嫌な方は今すぐバックブラウザでお戻りください。補足は、東方変物伝説明・補足などをどうぞ。

プロローグ（前書き）

改めて投稿しました。すみませんm（| |）m

プロローグ

幻想郷、そこは忘れられた、つまり幻想となったものが集う所。

そこは、いつも人間や妖怪などが住んでおり、非常識なことが起こる”楽園”

もしも、そこに平凡な、しかし平凡じゃない、そんな矛盾な人間が現れたら

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」
やあ、俺の名前は月夜陶哉^{つきよたうや}。東方厨で、料理が趣味な平凡の中学生だ。

で、今、なんで息を切らしているのかというと、今日は例大祭があるからだ。

「よしっ！ここを登ったら着くぞ！」

どうでもいいが、実は中学になってから例大祭に行くのは初めてだったりするんだな！。

「ふー・・・着いた！・・・ん？今回の例大祭は延期？な・・・ナンドゥッテー！」

・・・せっかく変な勇気使って頑張って来たのになあ・・・。

「仕方ないな・・・帰るか。」

俺は、とぼとぼと来た道に戻ろうと足を動かす。

「・・・っ！う・・・ぐう・・・なんだ・・・これ・・・は・・・」

苦しい。ただ苦しい。急にそんな感覚に俺は襲われる。

「ぐうっ・・・う・・・く・・・」

しだいに俺の意識は消えていき、ついに俺は気を失った。

第一話 転生？（前書き）

前の変物伝は黒歴史だった。そう自分に言い聞かせて・・・

第一話 転生？

はい、どうも、陶哉です。

いきなりですが、今、俺は人生で初めての経験をしています。落ち着いて聞いてください。

「俺・・・浮いてる・・・」

はい、浮いているのです。文字通りに。

しかも、その状態で俺にそっくりの人を見下ろしています。

夢だと思い、頬を抓つかりましたが普通に痛いです。

つまり、現実です。

あまりにも唐突なこと、なぜか敬語で話しています。

「さて、どうしたものか・・・」

しかも、無駄に冷静なんです。ええ。

その貴方、ひとりで誰かに語りかけている時点でおかしいだろなんて突っ込んだら負けですよ。

っていうか、そのことは俺にメタ発言させている作者に言うてください。

「・・・？あれっ？俺、なんか浮いてる高さあがって行っかね？」

・・・どうしたことでしょう、天にでも召されるのでしょうか？

「え・・・ちよ、勝手に体が・・・！」

体が勝手に動いています。上へ上へと。

「ちよ・・・酸素が・・・違うかもしれないが幽霊になったんだったら酸素なくてもいいだろ・・・う・・・」

はい、やばい状態です。次第に酸素が消えていっています。っていうか意識も飛んで・・・

「……………はあ？」

この爺は今なんていった？イライラしてたから俺の寿命を終わらせた？

プチン……

「いや、だから私がいらいらし〜」

「ふざけんなよクソ爺！てめえ、イライラしてたから人の寿命を終わらせた？おこらねえはずねえだろうが！！ふざけんなよおらあ！！」

「うわッ！切れたッ！！」

「だいたいお前な、そんな失敗するから名前ももらえねえんだろっがよー！！」

「お……落ち着いてくれ、こっちも詫びとして願い事を一つか

なえてやるからs」

「ああん？なんぞ、その上から視線は！！しかも人の寿命終わらした詫びが願い事を一つだけかなえるう？すくねえんだよ！！」

「ひっ・・・ひいっ！わ・・・分かった、いや、分かりました！好きなだけ願い事を申し上げてくださいませッ！！」

どうやらこの爺、威厳は見せ掛けだったみたいだ。かなりの小心者だ。

「・・・よろしい！（ニコッ）」

自分で言うのもなんだが、かといって俺も小心者をいじめるほど嫌な奴ではないからな。ここらへんで許すか。願いが叶うんだしな。

「じゃあ、願いを言うぞ。」

「は・・・はいっ！」

なんか、態度が逆になったな・・・

「まず、俺を東方の世界に転生させてくれ。東方Projectだぞ？」

例大祭に行こうとしていたことから察せると思うが、俺は東方が好きだ。所謂、東方厨と呼ばれる分類の人間だ。

「はい、東方の世界ですね！」

しかし、急に態度が一変したな。ぜんぜん爺っぽい口調じゃないし。

「ああ、で、そこに行く際に能力も俺にくれ。できるだけ実用性があるものを。」

「はい、じゃあ、万物を変えられる能力、名づけて”ありとあらゆるものを変える程度の能力”でよろしいですか？」

「・・・実用性があるのか？それ・・・」

「ええ、この”何でも導き機”が弾き出した能力ですから・・・多分（ボソッ）」

「便利なものなんだな・・・でも、最後に多分とか言っただけだったか？」

「い、いいいえ！！言っただけじゃない！！」

怪しいな・・・

第二話 幼馴染（前書き）

二ヶ月も更新しておらず、申し訳ございませんでした。
ちなみに、新キャラの維織は、この物語のメインキャラクターにするつもりです。

第二話 幼馴染

いつもは、木々が風で揺れる音だけが聞こえる森。
だが、今日は違った。

「ふえええええええええええええええええん!!!」（訳）たすけて
ええええええええええええええええ!!!」

やあ、陶哉だ。

出始めに叫んでてすまない。実は、今俺は窮地に立ってるんだ。
いや、立っては無いな。

” 陥（落ちい）っているんだ”

まあ・・・そんなの無理な話だ」

「うーん。ここはどこなんだろう？」

・・・はい？いま、人の声が聞こえた？マジで？タイミング良さぎねえ？

っていうか、どっかで聞いたことある気がするんだよね・・・この声。

とりあえず、声を出して助けを求めよう。

「うー！うー！」（訳）おーい！うおーい！」

・・・レミリアじゃないぞ？

「うわっ！何か聞こえる！？なにっ？なにっ？お化け？！うわぁ・・・怖いよ」

・・・落ち着けよ。お化けじゃない。

とりあえず、もう一回助けを求めよう。

「うー！うー！ー！！」（訳）おーい！応答しろおおー！！」

これでどうだ？さすがに伝わるはず・・・。

「・・・えっ？これって・・・赤ちゃんの声・・・？こ、こっちはな・・・？」

おっ、伝わったか・・・？

「あ、赤ちゃんだ・・・。かわいい〜！」

うわっ！後ろから来るとは卑怯な！

「抱いていい？ねっ！ねっ！」

はあ・・・？

「だー！だー！！！」（訳）良いわけないだろ！」

「わ〜い！いいんだ〜！」

・・・もう駄目だ、通じてない。

ところでやつぱりこの声に聞き覚えがあるんだが・・・。

「いい子いい子〜」

あ、顔が見えた。こいつは・・・！

「だー!?」(訳) 維織いおり!?!」

「うわっ!びつくりしたなあ・・・」

こ、こいつは幼馴染の佐々木維織ささきいおりじゃないか!なんでこんなところに!

「なんでお前がここに!?!」

「うわっ!赤ちゃんがしゃべった!?!」パツ!

ドスン!!

痛っ!急に落とすなよ・・・。

あれっ?なぜかしゃべれた?!

「あれ・・・?体がだんだん大きくなって・・・」

「きゃっ!あ・・・あれ・・・?と、陶哉!?!なんでここに?!?っていうか服が!」

うわっ!ちよっ!体が大きくなった分、服が小さくなって・・・!

「ちよっ!おい!こっち向くな!あっち向け!」

「わ、分かってるよ!」

やべえ!服どうしようか・・・。このままじゃ、服が破れちまう。

・・・そうだ、確かあの駄神が俺の能力は万物を替えることとかいつてたきがする。

あれだ、能力使って服を変えよう。っていうか、それしか方法が無い。

・・・あれ?どうやって使うんだ・・・?

「ね・・・ねえ、まだ?」

「まだってなんだ?!まだって!こんな短時間にどうしろと?!いいか!振り向くなよ!」

「わかってるよ・・・」

もういい、このままじゃどうせ服は破れる。一か八かで服が大きくなるように念じてみよう。

「服が大きくなりますように、服が大きくなりますように、服が・・・」

「そんなので何とかなるはずが無いよ・・・えっ!?!」

「!？何だよ・・・急に驚いて・・・うおっ!？」

変な声を出してすまない。

実は、服がでかくなっていたんだ。

・・・いや、マジだ。実際、俺も信じられない。

なんたつて念じただけで服がでかくなったんだからな・・・。

「すごい!どうやったの?!」

「いや・・・ただ念じただけが・・・。っていうか、いつの間にこつち向いてるんだよ・・・。」

「えっ?さつき服が大きくなりますようにとか行ってたあたりだよ?」

「普通に答えるなよ・・・。まあいい、なんでお前がここに?」

「それはこつちの台詞だよ・・・。だってさ、なに?例体裁?か、なにかにいくつて言つてきてそこで心臓麻痺になつて死んだはずの陶哉が生きていたんだから・・・。」

「さらつと怖いことをいうなよ・・・。後、例体裁じゃなくて例大祭だからな。」

「ああ、それぞれ。」

「で、お前はなんでここにいるんだ?」

「分かんない。陶哉の葬式に出席して、終わつて帰るときに転んじやつて、起き上がったたら知らないところについてたんだよ。まあ、陶哉がいたからよかつたんだけどね。」

「その言葉は聞き方によつては新手の告白か何かになるからな。」

「幼馴染だからいいでしょ」

「はあ・・・。まあいい、とりあえず、これからどうするかだ。」

「適当に歩き回つてたら誰かいるかもしれないよ?」

「あんな、ここは見た限りじゃ森だぞ?無駄に迷つて野宿、なんてことになつたらどうするんだよ。ましてやお前は重度のドジで方向音痴だろ?」

「うーん・・・。確かにねえ・・・。じゃあ、陶哉はどうするって
いうの?」

「うん……。信じられないようなことばっかりだけど、今まで実際に信じられないようなことが起こってきたから信じるよ。」

案外簡単に信じたな……。

「よし、じゃあこのGPSに沿ってここからでるぞ。」

「うん。」

そして、GPSの案内が元いた世界のものだったということとを二時間後気づいたのはまた別の話……。

第三話 野宿？んー・・・野宿？野宿・・・じゃないな。(前書き)

更新が遅れて申し訳ございません！
ラストが微妙ですね・・・。

第三話 野宿？んー・・・野宿？野宿・・・じゃないな。

ぜんかいのあらすじ

だじんにもらったじーぴーえすがやくにたたずにつきよくまよっ

ちやったよ！

なんてこつたい・・・。

とりあえずやるだけやってみるが。

「おい、維織。さつき渡した携帯渡してくれ。」

「ん？うん。えー……つと、ここに……。あれっ？こっちのポケットかな？……ん？あれっ？」

「……おい。維織？」

「ちよつと待っててね……。今探してるから。」

「……。」

(そして五分経過……)

「……。維織。」

「ひゃい?!えつと……何……かな？」

「正直に言え。携帯どこかに落としたな?(ゴゴゴゴ……)」

「え……うん。ご、ごめんなさい。」

「はあ……。」

維織、こいつは無駄に冷静だったりするんだが、致命的なドジだったりする奴だ。

これが無ければ人間として天才の分野に入ってもいいんだけど……。

「……さて、これで打てる手はなくなった。仕方ない、今日は野宿だ。文句ないよな？」

「え……?それはちよつと「い・い・よ・な・?」「……はい。」

「

さて、野宿とは言ったものの、マジで野宿すると襲われる可能性とがあるからな……。

まあ、文句は言えないか。仕方が無い。

「とりあえず、できることだけして寝れる準備でもしてるからつるちよろするなよ、絶対だぞ！」

「わかつてるよ〜」

本当に大丈夫か?小さいころに遊んでたらなにがあったか隣町まで

行つてた奴だぞ・・・？

まあいい、とりあえずどうにか寢床を作ろう。

そもそも能力持ちとはいえ、とつさに能力が発動しただけで次ぎもまた上手くいくとは限らない。

とりあえず、あれだ、ド えもんのキ ンピング プセル的なノリでそこら辺に生えている木を変えてみるか。

俺は、気に手を置き、『木はキ ンピング プセルに変わる』と念じる。

すると、木は少し硬く、綺麗になつていく。

そしてだんだん白くなつていき、天辺は丸くなり、根元には入り口のようなものができる。

タララタツタラ〜キ ンピング プセル〜

脳内で某ネコ型ロボットが喋っている声が再生される。

あれだ、完成だ。

やったね陶哉！寢床が増えるよ！！

・・・やってみたかったただけだ。反省も後悔もしてない。

とりあえず、維織に報告だな。

「おーい、維織ー。これで野宿せずにすむぞー！」

「え・・・？うわっ！？なにこれ！陶哉がやったの？！」

「俺がやったつていうか、んー・・・。ああ、俺がやったつてことになるな。」

「・・・チートだね（ボソツ）」

「ん？なにか言つたか？」

「何も言つてないよ。」

「そうか・・・」

チートつて聞こえたのはきつと間違えでは無いだろう。きつと。

「とりあえず、入つたらどうだ？」

「うん、そうするよ。」

俺らは中に入つてみた。

とりあえず、感想としては広がった。

これだったら安心して寝れそうだ。
俺は、そう安堵すると、疲れが体に急にきて、そのまま俺はベット
で眠った。

月夜陶哉 詳細その一（前書き）

絵が雑なのは気にしないでください。

月夜陶哉 詳細その一

月夜陶哉

種族：人間

年齢：14

二つ名：外来人

特徴

転生することで東方の世界へと入り込んだ人間。生前の記憶を持っている、と言うことで外来人という扱いを受けている。

見た目は普通の男子であり、少々中性的である。

元料理部所属であり、料理の腕は高い。学力は中の上、運動は少々得意だ。

能力

『万物を変える程度の能力』

この能力は、力量によって変えられる規模が変わるが、使いこなせればかなり強い能力だ。

体の構成なども変えられるが、大量の体力消耗とある程度の苦痛がリスクとして伴う。

人間友好度：高

他種族友好度：中の上

危険度：低

顔

> i 2 9 9 8 4 — 2 8 7 7 <

第四話 捕まった(前書き)

今回も更新が遅れ、まことに申し訳ございません！
読みにくいところも多数あるでしょうが、読んでいただければ光栄
です。

第四話 捕まった

夢を見ている。

後味の悪くなりそうな夢だ。

一人の青年が、両手に剣のような、刀のようなものを持って走り回り、近くの獣はけものを切り刻んでゆく。

何の表情もなく、目は遠くを見ているような、虚無の目をしていて、それがただ延々と、現実味を持って続いていく。

ただ、殺戮を当たり前と思っっているかのような感じで・・・

「・・・うや、とうや、陶哉!！」

維織の声が聞こえる。

「んあ・・・なんだ・・・?」

「ちよっとおきて下を見て!！」

「ああ・・・?下・・・?」

俺は、ベットからおきて、窓の近くへ行く。

「下がどうしたんだよ・・・?・・・?・・・ええええええ
?!?!?」

俺が声あげた理由、それは今までいた未来の世界ではありえない
ことだった。

なにがあつたのかつて?それはな・・・

「おお・・・神はなぜ私をこのような目に合わせるのでしょうか・・・」

「はぁ・・・」
「どうも、陶哉ですよっと。」

全力で走りました。走りましたよ！

そして、たどり着いた先は喋れる獣曰く、妖怪の里だそうです。
どうでしょうか、この状況。

あ、補足までについておきますと、縄で縛られています。
ちなみに維織も。

「・・・どうするよ、維織」

「どうするってどうもできないよ・・・」

「静かにしやがれ！この下衆な人間が！」

「ちっ・・・」

「はい・・・」

さっき俺らに怒鳴ってきたのは、さっき言った喋れる獣の・・・いや、妖怪の迅ってやつだ。

ちなみに言つと、こいつはここで一番頭や運動神経がいらしく、
ここの頭領らしい。

性格はすげえ高飛車なやつだ。正直言つてうざい。

「んで、迅様よ、いったい俺たちをどうするって言うんだよ。」

「ふん、てめえらには知っても意味なんてねえよ！下種！」

「・・・。。。」

やべえ、殺気立ってきた。

「そもそも、この迅様にご拜見できたことだけでもありがたく思い
やがれ！どうせもう少ししたら死ぬだろうがな！ヒヤハハハハハ！

！」

「な・・・俺たちを殺すきか！」

「その前に少し使ってからな！ヒヤハハハハ！」

殺したい・・・。

つていうか、殺されるだつて?!

やばいな・・・まだ原作キャラに会ってないつていうのに死んでたまるかよ!

そんなことを思っていると、迅が別の妖怪に指示しているのが見えた。

何を話しているのだろうか。

おっと、迅が妖怪と一緒にこっちにきた。

「おい・・・この二人を牢にぶち込め!」

「グウオオオオ!!」

「ちよつ!!お前!!」

「いやっ!離して!!痛い!!」

「煩いんだよ!黙って牢に入りやがれ!!」

そう怒鳴ると、迅は俺の背後に回り、首に手刀を入れてきた。

俺は、何も抵抗することなく、そのまま地に転がり、意識を手放した。

第五話 拘束（前書き）

相変わらず、拙く読みづらい文ですが、読んでいただければ光栄です。

第五話 拘束

「・・・を・・・ける。・・・を・・・のだ！」

声が聞こえる。ところどころ聞こえないが。

たしか・・・俺は妖怪の里に逃げてしまって・・・牢に入れられて・

・

って、いい加減おきよう。何が起こっているのか確かめるべくも。

「うう・・・こ、ここは・・・？」

「やっと起きやがったか。下種野郎。手足を見てみな」

「手足・・・？」

俺は、言われたとおりにみてる。

「これは・・・」

俺の手足につけられていたのは、拘束具だった。

「・・・何をやる気だ？」

「なあに、見たところお前には莫大な力があるみたいなんでな、これですべてもらうぜ」

と、言いながらその小型の機械を取り出してきた。

「それは・・・？」

「人間の町の永琳からくすねてきたもんさ！これをつければお前の力はすべてこれに集まる。力が無くなったら・・・お陀仏だな！ヒヤハハハッ！！」

永琳・・・？！あの、八意永琳やちごうえいりんか？！

やっぱりここは東方の世界だったんだな！

つと、喜んでいられる場面じゃない！このままだと死んでしまう！！

「さて、早速つけるか。」

「っ！やめろ！！」

「やめねえよ。」

そっいいながら、機械から出てきた吸盤のようなものが体へ迫ってくる。

「やめてくれ！やめろおお！！」

「ヒヤハハハハッ！もつと怖がれ！！」

「うわああああああ！！！！」

もうだめだ。今度こそ死ぬ。

いままでよく生き残れたな、俺。

来世ではいい人生を送りたい。

「南無阿弥陀仏・・・」

「お、観念しやがったか。だったらせめて早く終わらせてやらないとなー！！」

「・・・。。。。。。つ?!」

急に、何か黒いものが体に広がっていくのが感じれる。

なんだ、これは?!

黒いものが広がっていくごとに、体に力が宿っていくのがわかる。

のだが、おかしい。なにかに乗っ取られる感覚もある。

そして、黒い何かは体全体に広がった。

その瞬間、意識がとんだ。

いや、とんだではない。違うところへと移動した感覚だ。

そして、声が聞こえた。

後は、俺に任せろ。と。

俺は、それを聞くと意識を手放した。

）Side???)

・・・もう眠ったか。

やれやれ、やっと表に出れた。

陶哉の奴は、まだ実力的には拙い。

この世界で生きていくにはまだ無理のある体だ。

俺が定期的に出ないとな・・・。

つと、今はそんなことを考えている暇は無かったな。

俺の、いや、俺らの力が採られるなんてふざけたことを抜かしている奴にお灸をすえないとな。

「さあ、抵抗は無駄だ！これでお前は死ぬ！」

迅はそう叫んでよく分からない機械をこっちへ近づけてくる。
無駄なことを……。

「誰が死ぬって？」

俺はそういつて、拘束具を壊す。

うむ、まだ力は衰えてないようだな。

「っ？！貴様、何を！」

「何って？見て分かるだろ。拘束具を壊しただけだ。馬鹿か？」

「この野郎！俺様を侮辱しやがったな！殺してやる！！」

迅はそう言い、殴りかかってくる。

「……遅い」

俺はそう言い、奴の攻撃をよけた後、神経を集中させ、手の中に愛用している武器、黒刃こくはを生み出す。

「なっ……馬鹿な！」

「はあ！」

俺は掛け声とともに、黒刃を鞘からだし、左手で逆手に持って左腕を狙って斬る。

「ぐわあああつ！？」

「情けない声を上げるな。もう一撃だ」

今度は、右肩を狙って斬る。

「ウアッアッアッアッ！！腕がああああ！！！！」

「うるさいな。眠らすか。」

黒刃を納刀し、鞘をつけた状態で首筋を狙って打つ。

「ぐおっ……」

「しばらく寝てる。」

俺は、そう言いはなつて、迅が気絶したのを確認した後、拘束室から出る。

「さて、さっさとこの里から出るか。」

俺はそうつぶやき、外へと歩いていく。

おっと、そういえば維織とやらを連れて行かないとな。

俺は、牢のあたりに戻る。

・・・維織はつと・・・。

お、いた。寝てるな。

・・・仕方ない、担いでいくか。

あ・・・やべえ。そろそろ陶哉がおきる。

まあいい。迅は寝かしてるしな。

俺はそう思い、意識を手放した。

第六話 黒刃と永琳（前書き）

タイトルどおり、永琳がです。
あいかわらずのグダグダですが、見ていただければ幸いです。

第六話 黒刃と永琳

また夢だ。拘束されている夢。

俺はあの後どうなったんだ？死んだのか？

わからない。思い出せない。

場面が変わる。

俺は・・・女性？になっている。

周りには妖怪らしきものたちが。

そして、遠くにいる妖怪に囲まれた男性のところに行き、怒鳴られて後ろを見ると妖怪が爪を下ろしてきて……………

「うわあああ!!」

「うわっ!びっくりした!」

「ん・・・?あれ?ここは?」

あの後、気づけば俺は元の牢獄のところで横たわっていた。
たしか、俺は拘束されて、絶体絶命の危機に陥ったときに意識が薄
れて・・・。

体は動いていた気がするんだが、思い出せない。
なにがあったのだろうか・・・。

「んー？聞こえなかつたけど・・・」

「そ、そうだよな。変なことを聞いてすまなかつたな」

（今すぐ、人目のつかないところへいつてくください）

「・・・えっ？」

「？」

「あ、ああ、すまん。ちよつと外の空気吸ってくる」

「え？ああ、じゃあ私も。いつまでも牢獄にいたくないし、ちよつと見張りもいないし」

「いや、ちよつと周りも見てくるから待っててくれ」

「え？うん。わかつた」

俺は、外へと出る。

・・・外には誰もいなかった。

昨日はあんなにもたくさんいたのにな。

なにがあつたんだろうか。

まあいい、俺は妖怪の里から少し離れたところへ行き、こつつぶやく。

「・・・で、誰なんだ？声の正体は？」

（・・・申し遅れました。私、ご主人様が持っている、黒刃こくはと申します）

「ご主人様つて俺か？黒刃・・・？まさか、腰のこれか？」

（そうであります。私、武神の血を継ぐものに代々同行させていただいている人格のある刃物でして）

「武神の血？俺が？」

（ええ。ご主人様は、まだ目覚めてはいないものの、体に武神の力を宿しております）

「なんだこの中二病設定。というか、いままで十分中二病設定だったけどな」

（中二病・・・？ともかく、私はご主人様、いえ、陶哉様の力にな

るべく、陶哉様のもとに参ったのです。陶哉様の前世の方も、武神にはなりませんでしたが武神の血を継いでおりましたので、私が同行していました)

「へえ……。前世ねえ……」

(ともかく。私は陶哉様の力になりますので、困ったときはいつでもお呼びください。また、危険に冒されたときは私を抜刀してください。そのときはあなたの意思の形となり、陶哉様の武器となります)

「……。いまいち分からないが、とりあえず把握した」

(それでは、私はこれで……)

黒刃はそういい、喋るのをやめた。

「……とりあえず、早くここから出るか」

俺はそういい、維織のところへ行った。

「維織！」

「ん？ああ、陶哉。どうだった？」

「ああ、問題ない。今のうちにここから出よう」

「うん。」

俺たちは、走って牢から出、そのまま里からでた。

「これからどこに行くの？」

「とりあえず、人間はこの時代にいるみたいだ。人間を探そう」

「……。わかった」

しばらく走ったところで、歩きへとかえる。

根拠も何もないのだが、あてずっぽうに人間がいるところを探す。

そうすること、三時間……

「……。疲れたな」

「そうだね。」

俺は、ナツプサツクの中から、水を出す。

「ほら、維織。水だ。飲めよ」

「いいの？」

「気にするな。もう一本ある」

ありがとう。といいながら、維織は水を飲む。

しかし、このままじゃ餓死しちゃうな。

どうにかならないだろうか……。

とりあえず……、よしこれだ。

「維織、ちよつと食べそうな木の実とかないか探してくる」

「え？あ、うん。行ってらっしゃい」

「あ、それと一ついっておく。ここから動くなよ」

「えー……」

「う・ご・く・な・よ！」

「はい」

本当に大丈夫か心配だ。

まあ、とにかく蜜柑つばいやつとかそんなのでも集めてみるか。

俺は、近くを歩き回ってみることにした。

S i d e 〱???

「はあ……はあ……」

私は、今妖怪から逃げている。

サンプルデータを集めるために、森へと入ったのだが、運悪く妖怪に出会ってしまった。

「ガロオオオオオオオオ！！！！」

「しつこいわ！」

私は、弓を射って妖怪の眉間へ飛ばす。

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

「いまよ！」

私は、妖怪の怯んでいる間に逃げる。

そういう声とともに、妖怪の悲鳴が聞こえる。
目を開けると、そこには一人の少年がいた。

side↳陶哉↳

俺は、あれからしばらく木の実を探していた。
すると、途中で少女の悲鳴のようなものが聞こえた。
俺は、気になり声のするほうへと走っていった。

そこには、集団の妖怪に囲まれた銀髪の少女がいた。
妖怪の中には・・・迅もいる。
助けないとやばいよな。

「おい、黒刃。どうすればいい？」

(陶哉様、あそこの少女を助けるのですね。では、私を抜刀してください)

俺は、言われたとおり抜刀する。

少々重量があるが、もてない重さではない。
すると、驚いたことに刀の大きさだった黒刃は、太刀の大きさへと変化する。

「これは・・・？」

(これは、陶哉様の意思の形です。おそらく、一番扱いやすいはずです)

「そうか・・・。それじゃあ、行くぞ！」

(はい！)

俺は、銀髪の少女の所へ走りこむ。

そして、妖怪を一匹きり付けた。

「なに集団で一人をいじめてんだ？ああ？」

「な・・・お前はあのときの・・・！」

「そうだよ。お前に殺されかけた陶哉だよ。」

「フ・・・ハハハハ！まあいいぜえ！一人殺す相手が増えただけじ

迅がそう命令すると、残りの妖怪は逃げていった。

「はぁ・・・はぁ・・・やったか・・・？」

俺は、服についた僅かな肉片を震える手で払いながらそうつぶやいた。

「あの・・・」

俺は、後ろのほうから声をかけられる。

振り向くと、そこにはさっきの銀髪の少女がいた。

「さっきはありがとう。助かったわ」

「なに、気にするな。・・・あ、そうだ。君、人間だよな？」

「え？ええ」

「だったら、俺と俺の幼馴染を人間の住んでいるところに住まわしてくれないか？」

「・・・どういうことかしら？あなた、住んでいるところないの？」

「ちよつと訳ありだな。どうだろう？」

「・・・そうね、あなたは命の恩人だもの。いいわよ」

「本当か？すまないな」

「これ、もってて」

そういわれ、俺はカードを渡される。

「これは？」

「それは、人間の町に入るために必要なものよ。だからもってて」

「あ、ありがとうな。そういえば、君の名前は？」

「私の名前は」

八意永琳よ。」

こうして、俺は初の原作キャラと出会うこととなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427t/>

東方変物伝 ~ Power that changes everything

2011年11月16日14時00分発行